

博士論文要約

『万葉集』と中国古典文学との比較研究

——詠物の表現を中心に——

著者：孫瑋

学籍番号：LD151010

1 問題提起及び研究目的

本研究は、『万葉集』における花鳥の歌と漢詩との異なりに注目し、『万葉集』独自の花鳥の像を探るものである。

『万葉集』を解明する方法はさまざまあるが、中国古典文学からの受容が重要な課題だと思う。ゆえに、『万葉集』と中国古典文学との比較研究は、『万葉集』の研究にとって極めて必要だと考える。本研究は、諸先学の研究方法を学びつつ、『万葉集』における詠物的な表現がいかに定着したか、について考察する。特に花鳥の歌は、詠物詩からの影響を受けた上で生まれたと頻りに論じられている一方、漢詩との差異に注目する研究がほぼ見当たらない。そして、その差異を最も浮き彫りにするのは、特に恋情に関わる花鳥の歌であると考えられる。

本研究は、花鳥の歌における恋情との結びつきに絞りつつ、『万葉集』における詠物的な表現の受容を考えていくことで、万葉独自の論理を探るべく、漢詩との差異について明らかにしたい。また、考察対象に措定するのは、歌にも詩にも好まれた題材である「梅」、「鶯」、「ホトトギス」（杜鵑）、「雁」、「黄葉」である。従来の研究は、『万葉集』における花鳥の取り合わせを論じる際に、ほぼ漢詩からの受容を論じているが、本研究は漢詩との関わりも考察した一方、花鳥詩の影響を受けて生まれたと指摘されている花鳥の歌から、万葉固有の発

想を抽出し、外来した詩的な表現と絡み合いながら展開していく『万葉集』独自の「花鳥」の像を解明することに目的がある。

2 論文の概要

第一部では、初唐までの詩文における「梅」「鶯」「雁」について時代順に用例を分析し、語の表現史を確認してきた。その結果、各表現がそれぞれの時代にどのように詠まれていくかを細部まで把握することができ、詠み方の変遷の流れも解き明かしてきた。

第二部では、第一部で考察した漢詩の表現史を踏まえた上、『万葉集』における梅と鶯、ホトトギスと卯の花・花橘、雁と萩・黄葉との取り合わせにおける恋情との結びつきを考察してきた。

第一章では、まず巻五の天平二年の「梅花歌三十二首」の序文における「落梅之篇」について検討してきた。漢詩における「落梅」という言葉が特に楽府「梅花落」を指すことを踏まえ、「落梅之篇」という表現は漢詩の楽府「梅花落」を指す可能性が最も高いことを前提として述べ、歌に詠まれている具体的な表現が楽府「梅花落」以外の漢詩からも摂取したことを踏まえ、「梅花歌三十二首」は「梅」の詩を一般的に受容したものである、と論じてきた。

続けて、「梅花歌三十二首」を中心に、梅と鶯との取り合わせを考察し、鶯が梅の花の散ることを「惜シ」む（五・八二四、八四五）、梅の花が鶯を「ナツ」こうとする（同・八三七）、梅が鶯の鳴き声を聞くと花を咲かせる、また鶯の鳴き声を待ちかねながらも花を散らさない（同・八四五）、など歌の表現により、鶯と梅の間に愛し合う恋人の関係が擬されたことを確認した。特に、「惜シ」という表現はのちに第三章で考察したように、花鳥の歌で共通する表現として頻繁に詠まれている。

第二章では、梅と鶯に先立つ、神亀五年の堅魚歌（八・一四七二）と旅人歌（同・一四七三）に詠み込まれているホトトギスと卯の花・花橘を考察した。堅魚歌と旅人歌の先蹤として考えられるのは、高橋虫麻呂の「詠二霍公鳥一」（九・一七五五、一七五六）であろうが、ホトトギスと花の間にあからさまに恋愛関係を擬したのは、堅魚・旅人歌を待たなければならない。堅魚歌は、ホ

トトギスを卯の花の「トモ」と捉え、両者が常に相伴う関係を示している。一方、旅人歌は、卯の花を離れ、人里の散ってしまった花橘を用いて和し、花橘を「片恋」しつつ鳴くホトトギスを造型している。それは、亡妻経験という特殊な背景のもとで詠んだが、ホトトギスと花橘を夫婦関係と規定する点に注目したい。天平期に入って、ホトトギスと花が主に賞美される景物となっていく一方、花鳥が能動的に行動するように詠まれていく姿勢は、特に堅魚・旅人歌から受け継がれたものだ、と考察を加えた。

第三章では、天平十年の「橘奈良麻呂宴歌」(八・一五八一～一五九一)を中心に、『万葉集』における「黄葉」について考察してきた。漢籍と同様に秋の寂寥感をもたらす例も見られる一方、『万葉集』における「黄葉」は春の「花」と一緒に秋の景として賞美されてもいる。「橘奈良麻呂宴歌」における「惜シ」「手折ル」「カザス」「ニホハス」などの表現を考察することにより、『万葉集』における「黄葉」が花のように眺め愛でられていることを明らかにしつつ、橘奈良麻呂の宴に詠まれた「黄葉」が辺り一面を照らすほど美しいものであることも推測できる。この結論を踏まえ、『万葉集』における「雁」と「黄葉」との取り合わせも、広い意味での花鳥歌として捉えた。

第四章では、ホトトギスの歌にすでに現れた花鳥と恋情との結びつきを汲み、かつ、「梅花宴」以降、花鳥の取り合わせが盛んになっていく趨勢において、雁と萩、雁と黄葉も恋情と結びついて詠まれた歌が現れたことを考察してきた。

雁と萩の場合は、結婚する意味の「逢フ」で両者の婚姻関係を示したり(十・二一二六・秋雑歌)、雁を待ってその鳴き声を合図に花を咲かせるという構図を採用したり(同・二二七六・秋相聞)、あるいは、よそのところに行く「雁」を「留」めようとする「秋萩」を詠んだりするような姿勢から、両者の間に広く存在する「恋」を読み取れる。一方、「雁」と「黄葉」の場合は、両者の継起並存することを示す「ナへ」(八・一五四〇・聖武天皇)、及び「雁」の歌における「寒シ」が恋人の不在によってもたらされた孤独感を持つことを合わせて考えると、「雁」の鳴き声から植物が寒々と感じて色づく、すなわち両者を恋人のように捉えることも可能であろうと結論した。

以上の考察により、梅と鶯、ホトトギスと花橘・卯の花、雁と萩・黄葉に、

それぞれ恋情を表す表現や度合いが異なりつつも、詩的表現によって花鳥の慕い合う世界を髣髴とさせることを明らかにした。

第五章では、漢詩における花鳥の取り合わせを概観した上、『万葉集』における動植物とそこに擬された恋愛関係が、独自の発想であることを論究してきた。

まず、漢詩において花鳥を主に絵画的に描こうとする姿勢と比較した上、歌の方が積極的に花鳥の間に恋情を詠み込むこと、及び花を待つ女に、鳥を訪れて来る男に擬したところに、『万葉集』の独自性が見出される、と結論をつけた。花鳥の歌における恋情との結びつきについて、さらに先立つ「鹿」と「菽」との取り合わせからその発想の源を検討してきた。その結果、花鳥の間に詠み込まれている恋情との結びつきは、詩的表現や方法を受容したことを前提にしつつ、動物が妻を求めようとする『万葉集』に古くからある発想を受け継いだ結果でもあることが、明らかになった。

終章では、各章の内容を要約した上で、本研究の成果及び今後の課題について論じた。

本研究の成果として、次の3点が挙げられると考える。

第一に、本研究は、初唐までの詩文における「梅」「鶯」「雁」の用例を年代順に分析し、「梅」「鶯」「雁」の表現史を確認した。それらの作業により、漢詩における表現の変遷を明らかにすることができ、漢詩の表現史が明らかになる一方、花鳥詩の全体像も把握することができるようになっている。それによって『万葉集』における受容が、漢詩のどの時点の表現を摂取したのかがわかるようになる。

第二に、梅と鶯、ホトトギスと卯の花・花橘、雁と秋菽・黄葉は『万葉集』においていかに恋情と結びついて詠まれていたかを明らかにした上で、花鳥の間に擬された恋愛関係が読み取れる点に通じることが明らかにした。また、それぞれの表現が、どのような花鳥の世界を構築するのかを明らかにした上で、漢詩と比較してその独自性を析出し、漢詩と異なる『万葉集』の花鳥の像を解明した。それらの考察により、今までの『万葉集』の解釈を修正し、花鳥の歌に関する新たな解釈を示すことができると思われる。

第三に、『万葉集』における動植物と詠み込まれている花鳥の恋情に寄せた関心が、第二期から詠まれている鹿の妻恋を受け継いだものでもあったことを論究した。さらに遡れば、『万葉集』一般に詠まれている動物の妻恋、及び『日本書紀』『風土記』にある記事に現れた鹿の妻恋への関心などが、その発想の源としても考えられる。漢詩から多大な影響を受けたと思われる花鳥の取り合わせにも、『万葉集』の独自性が現れていることを提言したい。

本研究が残した課題は、歌と漢詩とは異なる花鳥の世界を作り出す原因について、なお考究を深められるだろうという憾みがある。この点に関し、歌と漢詩との根本的な論理から考えることを今後の課題として設定し、さらに掘り下げたい。